

備忘錄

三浦

礼未

2010 年 9 月



2013 年 7 月



目次

モザイク	4
イルカ	8
きく	10
松島	13
電子レンジ	16
記憶	18
コンクリートに咲く	20
瓦礫	21
津波	23
走る	25
春	29
笑顔	33
岩船山	35
わだつみ（能楽『海人』より）	36
あとがき	40

モザイク

過ぎ越し日々
ただいたずらに

熱射の日

訪なう
過去への思い

変わってしまった
街
失われた
日常

が

粉々に
砕けた

あの時

土台だけの家
修復されぬ
堤防

の

姿

荒れた砂浜

視線を
はずす

海岸線に
並ぶ

車の列

海に浮かぶ

波乗りの

ひと

ひと

そこだけ切りとれば

なんの変りもなく

さらに

視線を

めぐらす

岬の木々ははぎとられ

岩は

姿をけし

あるいは

形を変え

混在する

引き裂かれた

時

砕け散った

日常

の

光景

は

いつ

また

積み上げられ

ひとつの

絵に

戻るのか

2013 年 7 月 いわきにて



イルカ

ありしひの
おもいでたどり
たどりきぬ

あの
9月のやすらい
えみかわした
ひとはどこ

ひとづてに
さいやくのひび
ひとたちをうけいれ
ひととき
のきばを
かしたときく
ホテルを
ふたたびたずねる

ひとかげもなく
くさむす
げんかんの
とじられたドアのむこう

ロビーのはてに
うみにむかい
あそびたわむれる
二頭のイルカの像だけが
かわることなく
たのしげに

みたのだらう
あのひの
まくろきうみを
ひめいを
かなしみを

ひさんを

イルカの像

こうふくな
わらいを
まとっていた
そのちよくぜんまでの
ときを
とどめて

かわったもの
のなかで
かわらぬから
みえるもの

とまった
とき

いつかまた
うごけ
えみを
まとして

きく

こえはなかった
でもふらず
ただ
ながされていく
やねにしがみつく
みしった
ひとのかげ

おしよせる
まっくろななみに
おしながされ
さらに
ひかれ
おきへとむかう

にどみたのだ
すぐまえを
ただ
みることしか
できなかったと

そのひとは
かたる

かたるしかないのだ

あのときを
むねんを

バスツアーで
おとずれた
ひともまた
こえもなく

ただ

きくしかない
きくしかないのだ

女川
マリンパル

そのときまで
かつきと
えみの
こうさしていた
ばしょも

いまはかげもなく

あきひがん

どだいだけの
さらち
くさむす
いえのあと

ただ
そこだけ
いろをのこし

菊の花束だけが

あち
こちと

たむけられていた

2012年9月 女川にて



松島

震災の年の9月
松島

海をいく観光船
群れる
かもめ

陸には
おびたしい
笑みと
活気

そこだけが
変わらぬように

しかし

両側の町には
なにもない
がれきとよばれる
思い出の
残骸
だけ

残し

表面は
なにも変わっていない
ようにみえて
客に向かう

遊覧船
建ち並ぶ
浸水の痕跡
とどめぬ

店先にも

にこやかさのかげに

おれたちががんばらねば

の決意を

自分を

ふるいたたせようとする

意志を

悲壮なまでの

島々に

守られた

幸運

だからこそ

だから

わたしも

以前と変わらぬ

観光客として

あたりまえに

わらい

飲み食いし

みやげを買った

あたりまえの

日々を

稀有なものと

こころに

刻みつつ

2011 年 9 月 塩釜にて



2011 年 9 月 松島にて

A photograph of a building's exterior. The building has a modern design with a glass facade and a large staircase. A large sign on the building reads "松島 かまにがー" (Matsushima Kamani-ga). There are other signs and banners around the building. A car is parked in front of the building. The sky is blue with some clouds.

15

電子レンジ

レジの前だった
今日から大売り出し
の朝

飛んで行ってゲットした
電子レンジ

クーポン券握りしめ
先着ウン名さまのサービス券で
小皿をもらい
カードにポイントを

まさにそのとき

揺れた

揺れた

いつまでも
おさまらぬ
揺れ

なんとか支払いを
の抵抗むなく

追い出された
入り口前
悲鳴
不安げな
顔
顔

どさり

店の奥から

なにかが落ちる音
売り場の天井だった
とか

揺れがおさまる
入り口前の
店員を捕まえ

電子レンジが
レジ前に置き去り
住所と名前と電話番号
あれこれあれこれ

だって
限定クーポン
なんだもの

いのちが無事なら
欲が出る

まあ
とっさの人間なんざ
そんなもの

記憶

にげろというから
すぐもどるつもりで
おさいふとか
おいて
うえにあがったんです
にどともどりませんでしたけど

このあたりは
うみぞいにこうじょうがあって
そのうしろのいえのひとたちは
いざというとき
こうじょうがぼうはていになると
おもっていたんです
じっさいは
つなみでこわれた
こうじょうのがれきがながれてきて
いえいえのいっかいをはかいしていったんですが

でもいっかいはこわれても
みんなにかいにすんでいるんです
(ぼつりぼつりと家が残っている)

あのようちえん
みんなやねのうえに
にげたんです

こうじょうですが
ふだんから
ひなんくんれんをしていたので
ぜんいんぶじでした
ただ
そのひおやすみで
いえにいたひとのなんにんかは
なくなりました

ここには
さかないちばから
さかながながれてきて
へどろのにおいとまざって
すごかったんです

なくなったかたも
あちこちに

さかのうえににげて
ほっと
あんしんしたところで
ぎゃくがわからのぼってきた
つなみにおそわれた
かたたちもいました

ほんとうにもうしわけないはなしなんです
しんさいちよくご
ひなんしょではかしパンしかたべられなくて
おとしよりはしょっぱいものがほしかったかたもおおく
かまぼこやの高政さんが
さしいれてくれた
ほかほかの
あったかい
あげたてのかまぼこが
ほんとうによろこばれたんですよ

ただの聞き書き
聞くことしかできない
だから
聞いて
書きとどめておく

女川石巻の
あの日々の記憶

コンクリートに咲く

なにもなくなった
コンクリートの土台の上に
咲く
色とりどりの
花

海にとらわれた
亡き人への
思い
とどけと

残された者が
おのが心を
絵具にたくし

描きつづられた

花

花

今は
空にいる
ひとへ

とどけと

瓦礫

おもいで
だよ

ふつうに
そこにあった
もの
だよ

おじいちゃんが
おばあちゃんが
おかあさんが
おとうさんが
おとこのこが
おんなのこが

つかっていた

ほんとうに
ふつうのもの
だったんだよ

いまは

瓦礫

とよばれて
いる
けどね

せいかつ
と
いきた
たいおん

わらったり

ないたり
たのしかったり
おこったり

そんな

おもいでの
かけら

ただ

つみかさなって
くちはてていく

いまという
あのひから
つづく

かわってしまった

にちじょうの
ふうけいの

なかで

津波

映像の中で
海が
押し寄せていた

波ではない

津波とは
海そのものだった

深く
厚みのある
黒く
重く
うねり
轟音を立て

海が
そのまま
押し寄せてきた

流されていく

車

車

あの中に
いるかもしれない
人たちの

.....

.....

ただ
見ているだけ

の
私

何もできず

ただ

見ているだけ
だった

あの日

走る

田舎の道を
バイクで走る

道が
あの日の後
妙にひび割れたり
でこぼこ
したり

行く先
行く先

大谷石で
組み上げられた
門柱は
立体パズル
になり

屋根瓦は
崩れ落ち

墓石はずれ

大谷石の
立派な
お蔵
は
出入口のある
真ん中から
ぐずっ
と
崩れ

壁の落ちた店
天井の落ちた店

餃子の
健太くんは
頭から
台座の下に転げ落ち
ぽっきり
首がおっかけた

封鎖された
高速道路の入り口

車一台もない
音もない
高速道路を
見下ろす
陸橋

それが

救急車
ジープ
が
列をなして
走っていくのを
見たとき

泣きそうなほど
うれしかった
心の中で
思い切り
手を振った
がんばれ
と

そして

作業用
あるいは

ガソリンを運ぶ
大型車

だんだん

北からくる
車も増えて

乗用車が
行きかい始めたころ

地区ごとに

塀がなおり
屋根が修復され
墓石が
もとの形に
おさまり
はじめた

少しずつ
戻っていく
日常の
光景

でも
まだ
石のお蔵は
そのまんま

残った痕
を
横目に

今日も
バイクを
走らせる

あの

時が
止まったような
異様な
日々
は

いまでも
妙に鮮やかに
心の中に

とどめられている

春

春の遅い
年だった

いや

たまたま
そう
感じて
いただけ
かもしれないが

花がいつまでも
鮮やかに
咲かなかった

冷えた
大気の中

写メ

小さな
雑草が
ようやく
つけた
花

かじかんだような
福寿草

さみしく
風に揺らぐ
白水仙

あたたかな
あかるい

春の日差しが
恋しかった

だから
撮り続けた

道端の
ちいさな
花々を

命を

画像の
中に
とどめて
おきたかった

時が過ぎ

三年目の
春

鮮やかな黄色
大輪の
福寿草

覆いかぶさる
梅の木が
匂い豊かに
咲き誇る
路地の坂道

菜の花畑
たんぽぽ

空は
穏やかな
霞をまとい

田舎の春
まっさかり

華やかに
咲く
花々を
眺めつつ

あの
春の遅かった

曇り空の
下

まるで

花々までも
鎮魂に
沈んでいるかのような
年を
思い出していた

2011 年春



笑顔

笑顔

いいよね

笑顔

子供の笑顔

震災の後

ずっと

開いていた

動物園

待っていたんだ

子供たちを

毎日

毎日

みんなが

来る日を

また

笑いながら

やってきてくれる

みんなを

なかなか

来なかった

今日も

今日も

今日も

.....

ひさびさに見たのは

おじいさんに

連れられてきた
近所の
子？

やっと
思い出したかのように

ぽつり
ぽつり
ぽつり

と

駐車場の
ロボットの像も
うれしげに

笑顔

あたりまえの
笑顔

動物園が
受け止める
入口の
Welcome ゴジラも

いらっしゃい
いっぱい
笑顔を
残して行ってね

と

岩船山

群馬からの帰り
（ちなみに芝桜見物）
バスの中から見えた
岩船山

ごっさり
崩れ落ちている

山体崩壊

思いもかけない
見たこともない
光景に

ただ
驚く

栃木県の
南の端の
こんなところまで
あの震災は
大地を
揺さぶっていたのかと

わだつみ（能楽『海人』より）

昔々
一人の海人

愛した夫
身をやつし
その浜に来た
大臣に
請われ

わが子の
栄達の約束と
引き換えに
千尋の底に
潜る

盗まれし
竜宮の宝玉を
取り戻すために

潜っていく
海人の
はるかな海上を
思う

なつかしげな
せつなげな
かなしく
おもいふかい

描写

ああ
あのむこうに
愛する人々が
いるのだと

遠く
へだてる
潮の

青

蒼

藍

あるいは

宝玉を
とりかえし
己が乳房の下を
搔っ切って
隠す

腰に巻かれた縄
陽光輝く海上への
ひとすじの
絆

人々の引く
それに
身を任せ

竜宮の討手に
体を
引き裂かれ
切り裂かれ
ズタズタになりながら

それでも

ただひとつ
わが子の未来への
のぞみを
みずからの
体の内に隠し
引き上げられた

海人の姿

.....

.....

能楽
『海人』

たぶん
私は
これから先

舞台を
見るたび

あの日の

多くの
母親たちと
子供たちと

そして

さらに

多くの生と死を

二重写しのように…

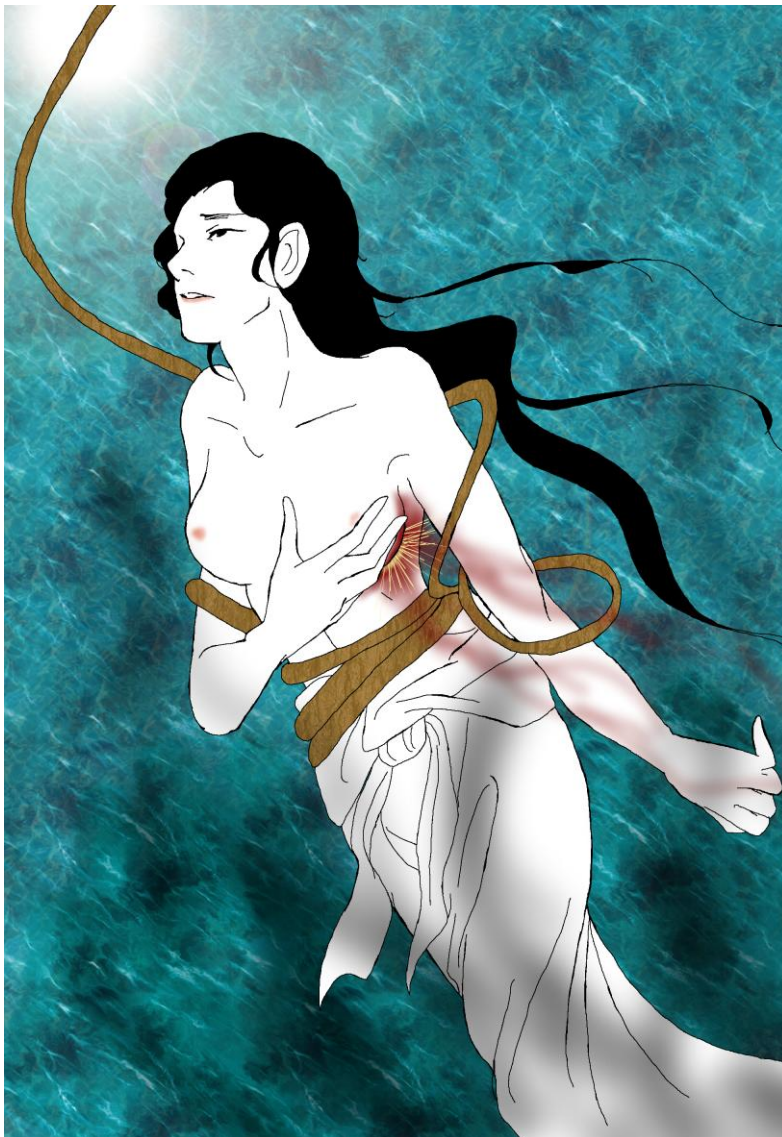
.....

.....

.....

わすれはしない
あの日と

あの日々を



あとがき

単なる備忘録です。それ以上のことは言えません。

あの日のこと。あの日から後のこと。見たもの聞いたもの。忘れないための書付です。

ほぼ6か月前の2010年9月、私は小名浜に旅行に行きました。いろいろ疲れることがあつての気分転換のための。

大津漁港の食堂で海鮮丼を食べて、シラスを買って。いわき・ら・ら・ミュウで浜焼きを食べてお土産を買って。泊ったのは岬の山の上にある小さなホテル。ロビーの前に太平洋を背景に遊び戯れる二頭のイルカの像がありました。とても穏やかな海でした。

朝、ホテルの下の浜に降りて散歩。きれいで静かな砂浜。岬の先にある岩場の風景と。犬を連れて海岸を散歩していた人の姿を覚えています。岬や浜の後ろに立ち並ぶ家々。

2013年7月、再び訪れたホテルは無人で玄関前に草が繁茂していました。ロビー越しに見えた二頭のイルカの像はそのままなのに。あの震災の後、このホテルは避難所の役割も果たしていたようです。

浜の方に降りてみると、土台だけ残した家々がまだ残っていました。あの岩場も形を変え、岬の緑もはぎ取られたかのように。ただ、戻ってきたサーファーたちの姿だけが活気を帯びていました。

帰り、山一つ越えると津波の景色もほとんど感じられず。あの旅行の時見た風景が残っているのが不思議に思え…。

震災時ボランティアにも行けず、何もできなかった私は、さしあたってできることをとあの震災の後、地元から出る震災復興バスツアーに何度か参加しました。

2011年9月に塩釜、松島、飯坂。まだ津波の跡がまざまざと残る塩釜の町並みの中で復興した笹かまぼこやさん、洗濯物や布団干しの光景にホッとし、松島は島々のおかげでほぼ浸水だけで済んだということでたくさんの観光客が来ていました。栈橋も船も無事。しかし両側の町が壊滅状態とのことで自分たちが頑張らねばという子もちが言わずとも伝わってくるようでした。

2012年9月には石巻と女川へ。ここで聞いたことは「きく」と「記憶」に書いたとおりです。でもその後NHKで放映された『ラジオ』のように女川の人たちはマリンパル女川を復興させがんばっています（詩の中では音感のため女川マリンパルと書いています。ご了承ください）ちなみに、この時購入してきたサンマの絶品だったことは特筆しておきたいです。焼こうとして手に持った瞬間の感触が全く違う。本当に生きがいい。食べたら味も最高。そのあと東京などで女川からのサンマがふるまわれたとのことうらやましくて仕方ありませんでした。あそこはぜひまた行って噂の海鮮丼を食べたいものだと思っています。

そして2013年4月には福島の花見山公園と二本松城址のお花見と、三春の滝桜見物。特に花見山公園は震災の影響でもう少し準備したいところ桜を見たいというお客のために公開してくれたとか。

2011年12月には日帰りドライブにて大津漁港食堂の再開を確認の上、いわき・ら・ら・ミュウとアクアマリンふくしまへ。この時は何よりも親に連れられてきている子供たちの笑顔が印象に残りました。両施設とも駐車場はまだ一部、でもそこにいっぱい車が止まっていたのもうれしかったこと。まだ前の片側三車線の道路も一車線しか使えませんでした。

2013年7月に再度立ち寄った時は三車線道路も開通。2011年の時よりもさらに車も多く。遊覧船も復活していたようでした。この時解禁されたばかりのシラスをさっそく大津漁港で購入して家に帰ってすぐ食べましたがやっぱりこれも絶品でしたね。

もともと食いしん坊なもので、今年の夏も何度も福島の桃を買って食べました。

いろいろ言う人もいますが、やっぱり人は生きているのです。自分たちの町で、地元で足を踏ん張って進んでいるのです。私は所詮当事者にはなれませんでした風なこととも言えません。だから今回、自分の見たもの、聞いたものを備忘録として詩集の形で発表することにした次第です。

ということで、震災直後、一番うれしかったことは何かというと、詩の中にも書いた地元の民間動物園が震災の後もずっと園を開けていたこと。子供たちがまた来てくれるのをひたすら待っていたこと。少しずつ少しずつお客が増えて、5月か6月の頃福島ナンバーの幼稚園か保育園の遠足のバスがとまっていたのを発見した時。こうやって来れるくらいになったところが出てきたんだということが特にうれしかったですね。

もうあのようなことが起きないことを祈りつつ。そして岩手・宮城・福島をはじめとするあの震災によって被災されたすべての人と町の復興を祈りつつ。『備忘録』を書くキーボ

ードを打ち終わそうと思います。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

2013 年 9 月 7 日

三浦 礼未

備忘録

著者 三浦 礼未

2013 年 9 月 7 日

発行 飛天逍遙